

OS-22 「雰囲気工学～ヒューマンコミュニケーション研究の発展に向けて～」

オーガナイザ：片上 大輔 (東京工芸大学)
湯浅 将英 (湘南工科大学)

ある飲み屋での出来事。「今日はお疲れ様でした」、「Aさんはおもしろい研究していますよね」、「いえいえ。Bさんこそおもしろい研究をしているじゃないですか」、「まあまあ。でも、エージェントがつくる雰囲気は一分野になりそうですが」、「今度 JSAI の全国大会があるので、OS を開きましょうか」、「OS 名はどうしましょうか」、「雰囲気の…工学??」なんて感じの会話ではありませんでしたが、2012年7月2日に飲み屋で「雰囲気工学」という言葉は生まれ、今年初めて OS を開かせていただきました。

OS：雰囲気工学では、複数のエージェントやロボットによる人工的な言語・非言語情報が作り出す会話場の雰囲気の分析、SNS や twitter に代表される Web などのメディアにおける複数の人の言語活動から推測されるネット上の雰囲気の分析などから、複数人が作り出す「雰囲気」を構成する工学的モデルを探ることを目指しています。当初我々は、分野の裾野が広がればとか、興味の近い研究者が少しでも集まるといいななど、軽い気持ちで OS を企画しましたが、さまざまな研究分野から 15 件もの発表申込みをいただき、良い雰囲気の中議論をさせていただきました (図 1)。

以下内容について紹介させていただきます。まずオーガナイザの一人である片上から、雰囲気工学全体に関する発表として、「雰囲気の工学的生成は不可能か?」と題し、雰囲気工学が生まれた経緯と概要、関連研究について発表しました。

酒造氏は、アンビエント情報を共有するセンサとコミュニケーション技術に関してこれまでの研究成果を述べました。越野氏は、twitter からの嗜好情報抽出とリコメンデーションシステムの開発を述べました。岩崎氏は、twitter やブログ記事における炎上分析と機械学習への適用方法を述べました。水上氏は、話し言葉の書き起こし文章のもつ話者性を自由に交換するシステムの話者判別と話者の役割変更を検証し、文章のもつ話者性の交換手法を提案しました。鈴木氏は、意識できない周辺情報と AI 研究の方法論とを組み合わせ、オフィスワークのモチベーションを向上させる方策を議論提起しました。田中氏は、PC 作業中のアプリケーション切替えタイミングに着目し、作業中のユーザの割込み拒否度推定に関する取組みを述べました。今井氏は、エージェントの顔表情、身体動作において、「無表出・曖昧な・明確な情報表出」の違いを評価し、「曖昧な顔表情」におけるコミュニケーション上の文脈の効果を述べました。坂原氏



図 1 セッション中の会場の様子。
大勢の方に来ていただきました。とても良い雰囲気でした

は、多人数議論において、マルチモーダル情報を用いた情緒的な発話の検出方法を提案しました。八城氏は、複数人からなるグループユーザに対応する会話エージェントにおいて、ユーザ同士の会話に介入し、かつ誰に対して何を話しかけるべきかのタイミングを決定するエージェントの開発に関して述べました。今吉氏は、「コミュニケーションの場」を情報的に拡張するシステムを提案し、「場」の内部では情報が共有され、創造的な活動が促進される拡張情報空間が生成されることを説明しました。山崎氏は、家庭電力管理システムのインタフェースとして触覚型心理表出要素 AHOGE を用いた親しみやすい電力使用状況の表現を提案しました。山本氏は、ロボットによる生活空間でのさりげないすれ違いを実現するため、全方向移動体の行動表示に色および矢印を用いた Color Panel Omni-Winker を提案しました。大村氏は、音楽による雰囲気生成を目的とし、音楽の複雑性とその時間発展の新たな概念に基づいた音楽生成システムの開発とその心理実験を報告しました。最後にもう一人のオーガナイザである湯浅が、抽象エージェントや複数体のエージェントによる雰囲気生成とそれらによる雰囲気研究の可能性を述べました。また、本セッションの議論のまとめを述べ、そもそも雰囲気とは何かを工学から考察することを説明しました。

発表者・参加者からは、さまざまなご意見をいただきました。ぜひこの活動を続けてほしいというご意見もありました。「雰囲気工学」は、ヒューマンコミュニケーション研究を発展させたものであり、多人数によってつくられる場およびその時間変化も扱う野心的なものです。今後ともより密な議論により、楽しい雰囲気のでき活動していきたいと思っております。ご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

〔片上 大輔 (東京工芸大学),
湯浅 将英 (湘南工科大学)〕